

皇道大本の思想と行動

—— 皇道大本前史 ——

水内 勇太*

はじめに

「皇道」という言説は、昭和前期、日本がファッション化していく中で、急激に人口に膾炙しはじめた。「皇道」を名に冠する書籍、雑誌が大量に刊行され、新聞紙面にも「皇道」の文字は躍った。敗戦にいたるまで、日本のあらゆるメディアは、いわば「猫も杓子も皇道」とでもいうような状況を呈した。

そのことを示す一つの具体的な指標として、新野和暢は『皇道仏教と大陸布教——十五年戦争期の宗教と国家』（2014）において、「明治記事索引集成データベース」を用いている。新野は、「タイトルに「皇道」が付されている新聞記事や論文等は1933年に飛躍的に伸びて、1934年にピークを迎えて」おり、「皇道」言説の、いわゆる十五年戦争期にかけての急激な増加を指摘している。

一方で、1930年代の「皇道」言説の濫発以前、「皇道」という言説はさほど人々になじみのある言説ではなかった。1930年代の「皇道」言説が、データベースのグラフの「山」を成す一方で、それ以前のグラフの平坦さは「皇道」言説のメディア上に浮上する事の少なさを示している¹⁾。

しかし、再度グラフを参照すると、昭和5年（1933）以降のピーク以前に、小規模であるが、大正6年（1917）から大正10年にかけてもう一つのピークの「山」が見て取れる。この「皇道」言説の「山」は、民衆宗教、新宗教の代表的なひとつであり、かつ特異な存在ともいえる大本教²⁾によって生み出された。「山」の具体的な内訳は、大正6年発刊の大本教の機関雑誌『神霊界』の記事と、大正9年頃から現われはじめる皇道大本への批判、批評、誹謗記事である。当時、教団名を「皇道大本」と名乗っていた大本教は、十五年戦争期以前の「皇道」言説

*みずうち ゆうた 同志社大学大学院文学研究科

の展開の中心にあり、その数少ない担い手であった。本稿においては、この「皇道」言説の担い手であった大本、「皇道大本」に焦点を当ててみたい。

まず、「皇道大本」期の大本教についての概要をまとめておこう³⁾。大本教は「皇道大本」という名称を二つの期間において用いている。まずは大正期、大本教はその教団名を「皇道大本」と改称し、「大正維新」を唱えて活動を展開した。そのラディカルな「皇道」思想は当局からの警戒をうけ、大正10年には第一次大本事件が発生し、出口王仁三郎をはじめとする幹部が不敬罪および新聞紙法違反などの容疑で検挙されるに至った。その弾圧後、皇道大本は教団名を「大本」に改称。人類愛善運動やアジア各国の宗教との連携など国際色豊かな活動を行うが、昭和8年再び「皇道大本」と改称。右翼活動家や軍部との交流を深め、皇道精神による「昭和維新」を掲げる。昭和10年、大正期以上の警戒をもって第二次大本事件による弾圧がなされ、大本教はほぼ壊滅状態にまで追い込まれることとなった。

「大正維新」においても、「昭和維新」においても、大本教は同様に「皇道」の理念を掲げているが、大正期においては「皇道」論は社会の主流に乗ったものとは言い難かったのに対して、昭和期においては、前述のような「猫も杓子も皇道」のごとく、帝国主義的、軍国主義的思想の核と共鳴し、広く受け入れられていく事となる〔對馬2013:43〕。そのため、大本教の「皇道」論は「天皇制国家の国家意志を先取りし、そのお先棒をかつぐ」ものであるとも評価されるものであった〔安丸1977〕。

そもそも、「皇道」という語は「[国体]という政治理念を、天皇崇敬の実践に引き寄せつつ、さまざまな思想的宗教的立場を包み込む包容的な制度を構築する語として幕末期に台頭してきたもの」と島藺進が評価しているとおり、その「包容性」を特徴とするものであった〔島藺2010:112〕。大本教の「皇道」論もまた、思想の「先取り」であっても、それは「皇道」という言説自体が持つ「包容性」〔同前:109〕の枠の中のものでしかないともいえよう。

しかし、ここで再考する必要があるように思うのは、「大正維新」期におけるその思想の「先取り」の内実である。前述のように、大本教が皇道大本を名乗った大正期、「皇道」という語は決してメディア上に頻繁にあらわれる語ではなかった。島藺によれば、明治、大正期における「皇道」なる語は、政治的な場面では表に出にくい語である一方で、否定できない正統思想として、近代化を進めようとする社会の主流の人々は敬して遠ざけるタイプの言説であった〔同前:111〕。すなわち、「皇道大本」と自らを表明することは厳然たる正統性を自らが有している事を宣言することである一方で、その「敬して遠ざける」べき語を教団名として表明すること自体、大いなる異端性の表明でもあったといえよう。加えて、当時、皇道大本の機関紙『神靈界』で喧伝された「大正維新」の内容は、私有財産、租税制度の撤廃など、「国家意思」に明らかに相反するものであった。皇道大本は、それが意図されたものか否かは措くとして、あたかも「皇道」の持つ正統性と包容性を利用するような形で展開していくこととなった。

本稿においては、明治・大正期において「皇道」という語が持っていた特殊性に注視し、大本教が「皇道大本」と改称するにいたる経緯を考察する。「皇道」という語を大本教にもたらし、「大正維新」期において「皇道」論を積極的に展開したのは、大本教の聖師出口王仁三郎であった。王仁三郎は何も「皇道大本」と改称してから突然「皇道」を論じはじめたのではない。彼にとって、「皇道」という言説は、大本教「以前」にすでにその理論の一部とともに獲得していたと思われる。王仁三郎は、宗教者としての歩み始めの段階において、「皇道」なる語を獲得しており、それから「大正維新」として世に出されるまで、王仁三郎はこの「皇道」なる語と長く「交流」を続けてきた。「皇道」という語により主体の形成をはかり、また「皇道」なる語を捉え直し続けてきたのだ。

本稿は、『大本七十年史』（以下、『七十年史』⁴⁾）などを基本資料として、大本教が「皇道大本」と改称するに至るまでの王仁三郎と大本教の組織編成の動きを、王仁三郎の視点に機軸を置きつつ、「皇道」なる語と王仁三郎との「交流史」として読み直す試みである。もしくは、『七十年史』の主語を、「皇道」という言説を基軸としつつ、「大本教」という教団から、出口王仁三郎という人物へとずらす試みであるともいえよう。以上の二つの視点から、出口王仁三郎像、そして大本教像、ひいては、民衆宗教史の再構築を試みたい⁵⁾。

1. 皇道霊学会 ——『本教創世記』と「皇道」のあらわれ

まず、出口王仁三郎が「皇道」という語に接近していく時期を、史料をもとに明らかにしていきたい。現存する史料で確認できうるものとして、王仁三郎が「皇道」の語を用いている最も古い例は、自らが率いる組織「皇道霊学会」という名称においてである。この組織は、王仁三郎（当時は上田喜三郎）が宗教者として歩み始めた明治31年（1898）に組織されたものである⁶⁾。

しかし、注意すべきはこの「皇道霊学会」という名称は『本教創世記』⁷⁾ という後年の王仁三郎の自叙伝にその典拠が求められている点である。その記述とは「京都府下に於て霊学会本部設置の件を認可し、皇道霊学会会長を命ず 稲荷講社総本部」⁸⁾ というものであるが、これは、王仁三郎が、静岡県に本部を持つ稲荷講社という組織にスカウトされ、本部を訪ねたところ以上のような辞令を受けた、という述懐によるものである。「霊学会」という名称自体は、王仁三郎に希望によるのか、稲荷講社より与えられたものなのかは不明であるが、「皇道」という語に関しては、稲荷講社の総理である長沢雄楯、その師にあたる本田親徳においても、この語を用いている例は無いため、少なくとも稲荷講社の意向に沿って「皇道霊学会」という組織名が与えられたとは考えにくい。そのため、「皇道霊学会」という名称は、明治31年の段階で、王仁三郎が自ら「皇道」の二字を付すように希望したか、もしくはそれ以降のいずれかの段階で付し、その名称の正統性を示すために、『本教創世記』においては以前からその名称を

用いていたかのように記述したかのいずれかと考えられよう。『七十年史』に明治31年9月2日に王仁三郎が弟上田幸吉に授けたと思われる「鎮魂帰神得業証書」なるものの写真が掲載されているが⁹⁾、そこでは「稻荷講社霊学会本部」と記されていることから、後者の可能性の方が高いとも言えるだろう。しかし、いずれの場合にせよ、王仁三郎が自らの組織の名称として「皇道」を付すことにこだわりを持っていたということは間違いないのではないだろう¹⁰⁾。ちなみに、『七十年史』では基本的に王仁三郎が稻荷講社から組織を許されたのは組織については「霊学会」と記述しており、「皇道霊学会」とはしていない。

『本教創世記』には、ほかに初期の王仁三郎の活動の相方ともいえる斉藤伸一という人物による「皇道演説でもやっては如何だ」¹¹⁾という言葉や、巡査から活動をとがめられた際に、「日本臣民として国家百年の為に皇道を發揮して、……惟神の徳性を宇内に宣揚するの目的である」¹²⁾という返答など、「皇道」なる語がいくつか用いられている。村上重良はこれらの語を評して、「日清戦争後の新聞雑誌に溢れていた型どおりの国家主義賛美の論旨」[村上1978]としているが、確かに「国体」や「忠君愛国」などの国家主義的言説が新聞雑誌に溢れていたことは事実であるが、「皇道」という語は一般的には決して頻繁に用いられる言葉ではなかった。そんな中で斎藤が「皇道演説」という語を用いるのも不自然であるし、『本教創世記』執筆時になされた脚色ともとることが出来よう。

『本教創世記』は、王仁三郎によるまとまった著作がなされる明治30年代の著作の一つであるが、現存している他の著作、『玉の礎』¹³⁾『筆の雫』¹⁴⁾などにおいては、「皇道」なる語が見当たらないため、少なくとも「皇道」の語が王仁三郎の理論の中核に接近しはじめたのは『本教創世記』が執筆された明治37年頃と位置付けることができるのではないだろうか。

『本教創世記』が執筆された時期、王仁三郎は、教団において、開祖出口なおとも幹部とも対立する非常に微妙な立場にあった。王仁三郎が積極的ななおと接触を始めるのは明治32年頃である。王仁三郎は、なおのために自身の霊学会の下部組織として金明霊学会なる組織の組織化を進めた。金明霊学会は、いわば大本教の祖形となる組織であるといえるが、その組織化のなかで、なお周辺の幹部から批判の声があがり、さらにのちにはなお自身からも激しい王仁三郎批判がなされることとなった。執筆する著作が幹部らによって焼き捨てられることがしばしばあったという状況の中で書かれた自叙伝は、そうした対立に対抗する、もしくはその対立を超克するような、自己の信仰と教学の体系化を行うという志向性を持つのではないだろうか。また、『本教創世記』の本文中に「今入門の子弟に解し安すき様、左に図を以て示すに任よう」¹⁵⁾「読者をして了解し易からしめん為めに。左に表を掲げて示さん」¹⁶⁾など、読者を強く意識している表記が散見する。教団内で対立が深まる中で、王仁三郎が意識したことは、読者、すなわち自らに追随してくれる人々に、自身の「現在」の志向性を示すことであろう。そのため、『本教創世記』を執筆することは、「過去」を正確に記述することではなく、「現在」もし

くは「未来」へ向けての自分自身の「過去」を捉え直していく作業でもあったといえるだろう。

そのような指向性の機軸となったのが「皇道」という語だったのではないだろうか。『本教創世記』および翌年執筆の『道之大本』¹⁷⁾ になお批判の文言が見られることから¹⁸⁾、なおとは異なる機軸を打ち立てんとする気運をうかがえよう。そもそも『本教創世記』の「本教」とは何であるかが問われなければならない。『道之大本』において、なおを批判する文言の直後に記される「本教は、暗夜のともしびである」¹⁹⁾ とする「本教」は、『本教創世記』におけるそれと同じものであろう。これら「本教」が示すものは、あくまでなおを開祖とする大本教とは異なる、もしくはその上位に位置する、王仁三郎自身の教団であろう。次項においては、王仁三郎のいう「本教」、すなわち、王仁三郎のアイデンティティの問題について、組織形成の点から考察を試みたい。

王仁三郎は「皇道会」という組織を組織化しようとしていた。この出来事は『七十年史』においてはあまり重要な出来事としては扱われていないが、王仁三郎と「皇道」との関わりについて考察する上では注視せざるをえない出来事であるといえる。

2. 「皇道会」——独自の「皇道」組織構想

明治36年、王仁三郎は、上記の稲荷講社を通じて「皇道会」なる組織を形成しようと静岡の本部を訪ねている。王仁三郎はなおに内密に静岡に発ったため、この案に反対していたなおは激怒、綾部の東北にある弥仙山に7日籠もり、下山後も別棟に百日間籠もり、「筆先」を書き続けた。『七十年史』においては、その記述はなおの弥仙山ごもりに重点がおかれ、王仁三郎の「皇道会」の組織化は警察の干渉に対抗するための方策とされている。

しかし、前述したように稲荷講社からはすでに霊学会の所属機関として金明霊学会としての活動の許可を得ているし、「本会は宗教上の主義より結集する者に非ざれば、何教何宗の信徒の入会するも不都合なき者とす」²⁰⁾ として、宗教団体であることも否定している。そこに改めて「皇道会」を組織することが果して警察の干渉への方策となりえるだろうか。活動の合法化という点においては、のちの大日本修齋会結成前後の教派神道系教会の設置（御嶽教、大成教、大社教）も同様であるが、これらは王仁三郎の組織とは無関係の組織であり、あくまで合法化のための「偽装」であるとする事が出来るが、自身の組織と直結した稲荷講社からの認可は、王仁三郎にとっては金明霊学会以上に「正統性」と持つものであり、単なる「偽装」とはとりがたい。

前述したように金明霊学会という組織は、大本教の組織の祖形ともいえるべき存在であるが、組織の内実は単なる祖形という言葉では捉えきれない複雑さを孕んでいた。金明霊学会は、なおの金明会と王仁三郎の霊学会（皇道霊学会）を連合する形で形成されたとされている。しか

し、注目すべきは、そもそも金明会という組織が、なおを教主、会長を王仁三郎とした上で、当時なおが所属していた金光教の教師足立正信を副会長としていた点である。すなわちこの組織は、綾部・園部での王仁三郎の稲荷講社を後ろ盾とする霊学会と金光教との対立/なおと彼女が所属する金光教教会との対立/組織形成時には顕在していないが、王仁三郎となおとの間の潜在的な対立、という三つ巴の対立関係を孕んでいたのである。このような形で形成された、金明会という組織は、特に足立の処置に見られるように、対立を解消するという政治的意図からなされた妥協的な組織形成とも受け止められるのである。

金明会から改称した金明霊学会という組織は、活動の公認の為に、組織的には稲荷講社に所属している王仁三郎の霊学会の下部組織であったという点もまた非常に重要な点である。すなわち、組織的に見れば、王仁三郎にとって、金明霊学会は自身の活動全体の一部でしかなかったともいえるだろう。事実、後年御嶽教に勤務したときの事を述懐するさいに、「従来唱へ来りし皇道霊学会の主旨により其組織を改め」²¹⁾ んとしたとされ、王仁三郎のアイデンティティは、金明霊学会ではなく、皇道霊学会にあったと考えるべきである。

以上のような金明霊学会の事情などを鑑みるならば、前述の「皇道会」組織化への動きは、むしろ王仁三郎による積極的な組織改革ととるべきではないだろうか。「皇道会」なる組織の名称は「皇道霊学会」に付された「皇道」の二字、『本教創世記』に現われる「皇道」の語と相まって、王仁三郎の「皇道」を中心に据えた組織づくりの志向性を示しているといえよう。「皇道会」の組織化の画策は、なおの弥仙山の岩戸ごもりのゴタゴタによって、頓挫してしまうが、この「皇道会」の組織化への動きこそが、のちの大日本修斎会、ひいては「皇道大本」へと連なっていくのだ。

3. 遍歴と大日本修斎会 ——「皇道」の錬成

明治38年3月28日、教団での孤立、そして金明霊学会自体の日露戦争後の衰微を受けて、王仁三郎は綾部を離れ、布教の旅にでる。この旅は、幹部による布教への妨害などによって綾部に幾度か戻されることがありつつも、明治41年で続くこととなる。その期間、王仁三郎は布教に従事するだけでなく、様々な遍歴を重ねることとなった。

その遍歴を大まかにまとめると、皇典講究所京都分所への入学/卒業、神職の資格獲得、武勲神社主典への就職/辞職、御嶽教での活動、綾部への御嶽教・大成教教会の設置、大日本修斎会の組織化、そして帰綾といったところだろう。

これらの遍歴は、教団の組織化、具体的には大日本修斎会の創立に向けての、将来の大本教のための「準備」として語られ、また王仁三郎自身もそのように回顧しがちだが、当時の王仁三郎の視点から考えれば、むしろ綾部での鬱屈な生活から解放されて、「とにかくやりたいこ

とをやった」といったものではないだろうか。そうだとすれば、綾部での抑圧を抜け出して王仁三郎の「やりたいこと」といえばなおの反対により頓挫した「皇道会」という独自の組織形成への画策が持っていたベクトルの先にあるものではあるまいか。

さて、その「とにかくやりたいことをやった」ともいうべき遍歴を評価するならば、その活動は当時の神道系の宗教者として、できることのすべてを、凝縮してやりつくしたともいえるほど精力的な活動であったといえよう。皇典講究所では正統なる「国学」を学び、神職を得ることでいわゆる「神社神道」のなんたるかを半年とはいえ実践を通して学んだ。そして、御嶽教ではいわゆる「教派神道」に属し、その内情を知った。王仁三郎はこの遍歴を通じて、いわば神道の構成要素のすべてを食いつくし、咀嚼しようとしていた。

いくつかの遍歴の中でも御嶽教での活動は注目に値する。王仁三郎はその霊学的手腕と政治的手腕をふるい、かなりの重役（理事・教師検定委員・評議員）にまで登りつめている。この御嶽教での活動を、王仁三郎は後年「年来主張せる皇道霊学に抛り天下に雄飛せん」²²⁾ とするためのものであるとしたが、この神道をすべて食い尽くすような遍歴は、自身の根本的理論である「皇道」を鍛えぬくものとなった。事実、大日本修斎会の機関誌で示された王仁三郎の皇道論は、神社神道も教派神道も、そしていわゆる国学をも超越したものとして示されることとなった。

王仁三郎は明治41年8月1日、御嶽教に所属しながら、綾部の組織を「金明霊学会」から「大日本修斎会」と改め、その規約も一新する。12月下旬には御嶽教の職をすべて辞し、綾部に戻り、教団づくりに専念する事となった。明治42年、王仁三郎は大本教初の機関紙『直霊軍』を発刊し、なおの「筆先」の一部を「神論」として掲載したほか、自身の論説をいくつも掲載した。その後、王仁三郎の組織力により、大日本修斎会は確実に教勢を伸ばしていくこととなる。

さて、王仁三郎の「皇道」論は、大日本修斎会の「創立要旨」に示される。それはまず教派神道批判として展開され、教派神道は「禁厭祈祷神占の所得税徴収所」と酷評されている。機関誌『直霊軍』は、「皇道思想を前面に出」す形で展開されていったとされ、更に王仁三郎は神社神道・教派神道いずれもを「一片の報国心も有するなく」、「腐敗墮落の極みに達せる」とことごとく批判している²³⁾。

教派神道批判において、『道の大本』の段階では「キリスト教か、天理教か、みょうれい〔妙霊〕か、くろずみ〔黒住〕か、こんこうきやう〔金光教〕か。これらもやつぱりいんしきやう〔淫祀教〕」²⁴⁾ としていた批判の対象を「教派」という言葉で捉えている点は、自身の「皇道」が「神道」を超えるものとしてあるという確信を伺わせるものであるといえる。教派神道に関しては「神道宗教」という呼称で捉えられ、「十中八、九まで殆んど偽善者の団体」「山師の巢窟」²⁵⁾ とまでされた。その結果、京都の人脈を通じて得ていた大成教からの公認が

取り下げられたが、出雲大社に訪問し、大社教から大社教本宮教会本院という教会名を公認されることで活動の合法化をはかった。これらの「皇道」論をめぐる理論的な強靱さ、組織における政治的したたかさは、遍歴を通して鍛えられたものであるといえるだろう。

「皇道会」の実現として大日本修斎会の組織に成功した王仁三郎は、いよいよ綾部に腰を据え、組織の拡大をはかる。大正2年7月12日、王仁三郎は大日本修斎会の会則を訂正し、「大本教々則」として発表した。この教則の条文において、はじめて教団名に「大本教」という名称が正式に用いられることとなり、翌大正3年7月に「大本教々則」が「大本教々規」と改称された際には、「本教は大本教（だいほんきょう）と称す」と明記されることとなった。

この大本教への改称に至るまでに、重要な出来事が二点ある。まず一点目は明治44年、これまで内縁関係のみであった王仁三郎とすみが婚約届を出し、戸籍上も夫婦になったことである。このことによって教団内での地位が完全に安定する事となり、綾部に安心して腰を落ち着ける事が可能となった。また、大日本修斎会の教線拡大と併せて、この事はなおの王仁三郎への信頼を高めることとなったといえよう。その結果として、二点目の「筆先」による王仁三郎＝「坤の金神」宣言がなされた。このことにより、王仁三郎となおは教義的にも完全な和解を果すことになったといえよう。

なおとの対立によって志向された「皇道会」構想は大日本修斎会によって実現された。大本教への改称は、この対立の和解と無関係ではあるまい。ただし、改称とされているものの、大日本修斎会の名称が全面的に廃止されたわけではなく、第一次大本事件をうけて大正11年に大本瑞祥会と改称されるまで用いられた²⁶⁾。

以上のような組織の整備と事業の拡充がはかられる中、ついに大正5年4月22日、大本教は「皇道大本」と改称する。この改称は明治45年に「大本教信条」、「大本教々教徒誓約」の原型として「皇道大本信条」、「皇道大本誓約」が発表されていたことからわかるように決して唐突なものではなかった²⁷⁾。これまで繰り返し皇道をその理論の中心に据えようとしてきた王仁三郎の「皇道会」構想を踏まえれば、むしろ満を持しての改称であったといえよう。

「皇道」が「神道」を越えるものとして想定される以上、それは大本「教」なるものに収まるものではなかった。そしてまた、大日本修斎会のもとなされる組織と事業の拡大は、実体として単純な宗教の活動に収まらないものであった事も確かである。王仁三郎が皇道研究機関として創設した根本学社の機関紙『このみち』の誌上において「本教は全然皇道宣布を目的として」おり、「皇道の中には政治も教育も実業も宗教も一切包含し」ており、「今般は一意専心に皇道言霊学と皇道の大本を宣布する」²⁸⁾ ことをその目的とする宣言は、まさに実体と実感を伴ったものであったといえよう。

自身の組織が「宗教ではない」という言説は、前述のように金明霊学会の会則の時点ですで見られたものである。それはあくまで警察からの活動の妨害を避けるための文言とも、布教

のための建前とも取れるものであったが、単に「宗教ではない」という消極的な表明が、対立と遍歴、事業の拡大という様々な要因によって、より積極的な意味合いとして捉えなおされたと言えよう。王仁三郎の「皇道」は、大日本修斎会の段階においてすでにそうであったように、教派/神社にかかわらず、「神道」をも超えたものとして展開されていくこととなった。その特性は、「政治も教育も実業も宗教も一切包含」するという「包容性」にあったといえる。

その論旨は、大正8年、皇道大本の機関紙『神霊界』に連載された「皇道我観」²⁹⁾において最もよく現れている。王仁三郎は「神道」と「皇道」との違いを指摘して、「神道=神道宗教」は「古来」から「現今」に至るまで、その本質が「明確に説明され、的確に実行され」る事が出来ておらず、それは「かえって神道の尊厳を汚濁するもの」であると批判している³⁰⁾。このように、王仁三郎が「皇道大本」を称した段階において、「皇道」の本質の「説明」=理論と、その「実行」=組織・事業を確固たるものとした事を自負していたのである。

おわりに

以上、大本教が皇道大本と改称するに至るまでの経緯を、王仁三郎の視点に出来るだけ寄り添う事を試みながら論じてきた。王仁三郎にとって「皇道」はその宗教者としての歩み始めの段階、もしくはそれ以前から、その思想の中に強く位置づけられており、それを金光教や、なおやなおの周辺幹部、その他様々な対立を通して、その対立を超える「包容性」を鍛えぬいていったといえる。それは近代天皇制国家が示した「皇道」論が持つ「包容性」と大いに重なりえるものであったといえよう。

しかし、繰り返すが、王仁三郎が「皇道」を通して語ったものは、あきらかに当時の国家体制への批判を含んでいた。「大正維新」において「皇道経済」なるものを主張したが、その内容は、租税制度と私有財産の撤廃という近代国家体制の根幹を揺るがすものであった³¹⁾。王仁三郎の「皇道」論は、国家意思を「先取り」するものでもありながら、その意思とは大幅なズレを孕んでいた。そのズレを可能にしたのは出口なおとの出会いであったのかもしれない。対立せざるをえない、統御することのできない「外部性」をもったなおを取り込むことで、「皇道」論をずらしていくことが可能になったのではないだろうか。

「皇道」なる語の「包容性」の所以は、万世一系たる天皇のもつ「正統性」にあるといえる。しかし、王仁三郎の語る「皇道」の「正統性」は、よりラディカルなものとして示される。そのラディカルな論理は、昭和維新期を越えた第二次大本事件後、一部の信徒の間に王仁三郎自身がいわばその「皇」となるという過激な発想、幻想として展開していく[川村2010]。「皇道」なる語は、近代国家においては表だって語りえぬ、いわば過剰な「正統性」を持つものであった。その過剰さこそが、「ズレ」や「異端性」を生むものであったのだ。ただし、勿論そ

の過剰さは「異端性」の契機であると同時に、「原理化」の契機でもありえ、近代天皇制国家を強力に支える源泉でもありえたといえよう。

注

- 1) 「雑誌記事索引データベース ざっさくプラス」<http://zassaku-plus.com/> 2015年3月閲覧。
- 2) 「大本教」という呼称についてはいくつか問題があるといえる。まず第一に、「大本教」はしばしば外部から名指される場合に用いられる呼称である点。「大本教」と呼称されてきた教団、組織、またそれらに属する人々は、大々的にその呼称を自身のものとして用いていない。第二に、それにかわるものとして現在適切な呼称がない点。「大本教」は、良く知られているように、数多くの新宗教、民衆宗教の教祖を輩出し、現在は「大本教」自体も大本、愛善苑、大本信徒連合会に分裂している。「大本」という呼称を代替として容易に用いるのはいささか不用意であるといえよう。第三に、「大本教」はその組織をたびたび改組し、その呼称を繰り返し変容し、複数の名称を用いることがしばしばであった点。金明霊学会、直霊教、大日本修斎会、大本教（だいほんきょう）、大本、皇道大本、人類愛善会、昭和神聖会、愛善苑……いずれが本体であり、下部組織であるか、本質であり、逸脱であるか、それを判別する事は極めて困難である。これらの問題を考慮し、本稿では「大本教」という呼称を用いることとする。
- 3) 本稿においては、大本教の具体的な動きについては特に断らない限り『大本七十年史』を参照する。
- 4) 大本七十年史編集会編『大本七十年史』上・下巻 1964年-1967年。本稿では上巻に該当する部分のみを扱うため、『七十年史』と略記する場合、上巻を指す。
- 5) 本稿作成にあたっては、『大本七十年史』研究会 2014年4月27日吉永進一氏、および6月22日栗田英彦氏の報告及びレジュメを参照した。
- 6) 時期は定かではないが、『本教創世記』によれば、王仁三郎は皇道霊学会以前に幽齋研究会と称して、「幽齋の修行」を実践する集団を少人数ながら組織していたようである(119頁)。
- 7) 村上重良編『出口王仁三郎著作集』第一巻(1972年 読売新聞社 以下、『著作集』)に所収。本文の日付により、明治37年1月から2月に書かれたものとされる。大正14年12月成瀬勝勇筆の写本を底本とする。
- 8) 『著作集』第一巻 143頁。
- 9) 前掲『七十年史』161頁。
- 10) 皇道霊学会という呼称をめぐっては、より多くの資料に基づく、詳細な考察が必要であり、資料の収集、比較、分析が今後の課題である。
- 11) 前掲『著作集』第一巻 93頁。
- 12) 同上 97頁。
- 13) 前掲『著作集』第一巻に所収。本文の日付により、明治36年10月に書かれたものとされる。本文の一部については、皇道大本の機関紙である『神霊界』に大正9年に連載されたほか、大正10年に『王仁文庫 第六篇 多満の礎』としても刊行されている。『著作集』は、大正15年細見睦順筆の写本を底本としている。
- 14) 前掲『著作集』第二巻に所収。本文の日付により、明治36年7月から翌年1月にかけて書か

皇道大本の思想と行動（水内）

れたものとされる。『著作集』に所収されているものは抄録であるが、最もまとまった形であるとされている。『神霊界』に一部連載されたほか、パンフレットのような形で一部の人々に配布された。『著作集』は、大正15年成瀬勝男筆の写本、大正13年の谷川常清筆の写本を底本としている。

- 15) 前掲『著作集』第一巻 74頁。
- 16) 同上 101頁。
- 17) 前掲『著作集』第一巻に所収。梅田伊都雄所蔵の出口王仁三郎の自筆本を底本としており、底本の表紙に「明治三十八年三月四日」と記されていることから、明治38年の著作とされる。
- 18) 該当箇所としては、「神道にいながら、……「へんぜうなんし」とか、……となうるおしへあり。これらはいんしのもつともはなはだしきものにして狂妄のさたといふべし」（『道之大本』『著作集』第一巻 195頁）および、「この世をたてなほすやくなり」とか、……いろゝさまゞのことをとて、おろかなるひとをあざむくあくまあり。かならず、まどわさるゝことなかれ」（同前 196頁）などが挙げられる。
- 19) 前掲『著作集』第一巻 196頁。
- 20) 前掲『七十年史』183頁。
- 21) 上田王仁三郎「論説」『直霊軍』4号 1909年6月10日 綾錦社。
- 22) 同上。
- 23) 上田王仁三郎「如何なる教を信仰すべきか」『直霊軍』3号 1909年4月4日 綾錦社。
- 24) 前掲『著作集』第一巻 190頁。
- 25) 前掲「論説」
- 26) 前掲『七十年史』691頁。
- 27) 前掲『七十年史』326頁。
- 28) 前掲『七十年史』341頁。
- 29) 『出口王仁三郎全集』第一巻(萬有社 1934年)に所収。
- 30) 同上 59頁。
- 31) 「大正維新について」『神霊界』大正6年3月号(『著作集』第2巻所収)など。

参考文献

- 對馬路人 「『人類愛善新聞』 解説」『復刻版 人類愛善新聞 別冊』不二出版 2013年。
安丸良夫 『日本ナショナリズムの前夜』朝日新聞社 1977年。
島藪 進 『国家神道と日本人』岩波新書 2010年。
村上重良 『評伝出口王仁三郎』三省堂 1978年。
川村邦光 「救世主幻想のゆくえ ファシズム期の宗教と文化」竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』水声社 2010年

要 旨

本稿は、民衆宗教、近代民衆宗教の代表的な一つであり、中でも特異な存在といえる大本教が「皇道大本」と自称するに至るまでの過程を、大本聖師、出口王仁三郎と「皇道」言説の展開を中心に再構築する事を試みる。「皇道」の語は彼の自伝である『本教創世記』執筆時である明治37年(1904)頃に理論の中核として意識され始められ、その理論は教団内での対立と孤立を受けて、新たな自分自身の教学を体系化しようとする中で打ち立てられたものであった。大本教の初期教団とされる金明霊学会も、出口なおとなおが所属する金光教、そして自身の霊学会との三疎みの対立の中で形成され、王仁三郎はその対立を超克するために「皇道会」という名称のもとに組織改革をはかろうとしている。こうした対立の中で王仁三郎が錬成していった、「皇道」理論の志向性の結実こそが、「皇道大本」という自称であった。王仁三郎の「皇道」理論は、「皇道」という言説自体が持つ「包容性」から免れぬものでありつつも、その内実にはズレや過剰さを有することによって、むしろその「包容性」を利用する形で展開する事となった。

キーワード：皇道大本、出口王仁三郎、本教創世記、金明霊学、包容性

Summary

This paper attempts to reconstruct the process by which Ōmoto-kyō, a major yet unique shin shūkyō (new religion) and minshū shūkyō (folk religion), came to call itself “Kōdō [imperial way] Ōmoto,” mainly focusing on its Seishi (sacred master) Deguchi Onizaburō and the development of its kōdō discourse. Onizaburō began to use the idea of kōdō as his theoretical core in 1904 in Honkyōsōseiki (“The Genesis of Ōmoto-kyō”), his autobiography. He created the theory of kōdō as part of his new doctrinal systematization that attempted to overcome opposition and isolation in his religious community. “Kinmeirei Gaku Kai,” an early period Ōmoto-kyō religious community, was formed out of the three-way deadlock between Nao Deguchi (the founder of Ōmoto-kyō), the “Konko-kyō” that she belonged to, and Onizaburō’s “Kōdo Reigaku Kai.” He aimed to overcome this situation by engaging in organizational reform under the name “Kōdō kai.” The aspirations found in his kōdō theory came to fruition under the name “Kōdō Ōmoto.” While the kōdō theory of Onizaburō could not avoid the subsumptiveness of the kōdō discourse itself, because the discourse had gaps and excessiveness, his theory actually developed in a way that utilized this subsumptive nature.

Keywords : Kōdō Ōmoto, Deguchi Onizaburō, Honkyōsōseiki, Kinmeireigakukai, subsumption